



TITLE:

質疑応答

AUTHOR(S):

CITATION:

質疑応答. CIRAS discussion paper No.93: 多民族社会マレーシアにおける移民と社会統合 2020, 93: 27-30

ISSUE DATE:

2020-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_93_27

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

質疑応答

●発言者

西 芳実 (京都大学)／細田 尚美 (長崎大学)／水野 敦子 (九州大学)／金子 奈央 (長崎外国語大学)／

舩谷 鋭 (立教大学)／山本 博之 (京都大学)

●司会

篠崎 香織 (北九州市立大学)

篠崎香織 (司会) ● 報告者の方より、コメントに対するお答えをお願いします。時間の関係で全てに対してお答えすることは難しいと思いますので、ご自身の関心に即して、それぞれお答えいただければと思います。

ホスト社会マレーシアにおける「まとまり」の変質

西芳実 ● 半島部はサバと違ってバンサの枠組みを壊すことはできないのではないか、あるいは既存のバンサに対する脅威とみなされて反発を受けるのではないか、というお話については、私もそうだろうと思いました。というのは、半島部のフォーマル・セクターにインドネシアから派遣された方の話を聞いて思ったことです。

インドネシア政府が現在、推し進めているマレーシアへの理想的な労働者派遣というのは、たとえば、製造業の組み立て工程、いわゆるラインでの作業に対応できるような人を派遣する、つまり、フォーマル・セクターで、法人雇用で就労させることを念頭においています。そのために派遣前にインドネシアで事前研修も受けさせる。こうしたいわばインドネシア政府の思い描く理想的な形で実際にマレーシアに派遣された方の話を聞いたことがあるのですが、半島部での暮らしに違和感を抱いたといいます。彼女はメダン出身のジャワ人のイスラム教徒です。派遣先はペナンの日系工場でした。仕事も待遇も不満はなかったのですが、日々の暮らしの中でマレー人らしく振る舞うことを強く求められ、ホスト社会であるマレー人のコミュ

ニティから自分たちの振る舞いが常に監査され、指導されているという感触があったと話していました。男女交際を含めて、インドネシアだったらまったく問題なかったような友人づきあいなどについて、助言されたり批判されたりしたということでした。最終的にこの方はミャンマー人の仏教徒の方と結婚してミャンマーに移住しました。イスラム教徒であることをやめてミャンマーに住むほうを選んだという方でした。

そういった話を聞くと、半島部では、マレー人を含めたバンサのあり方が、1950年代や1960年代の頃と大きく変わっていることを感じます。1920年代頃から1960年代頃にかけて外来マレー人がマレーシアの国民になっていく過程で存在していたマレー人のゆるいまとまり方というのが、もしかしたらもう変質してしまって、同質性・均質性を求めるまとまり方になっているのかもしれない。あるいは、混成的なマレー人のあり方とは異なるものが半島部で作られてきたことの裏返しとして、社会的なステータスとしては問題がないはずのインドネシア人移民がそこからはじき飛ばされ、インドネシア人側からみてもそこに入ることに対してすごく抵抗を覚えるという状況が生まれているということかもしれない、と思いながらコメントを伺いました。

マレーシアにおける取り締まり強化とフィリピン人移民の不可視化戦略

細田尚美 ● 2点のうち、最初のマレーシア国民との経済面などでの関係についてですが、私が今回話を聞

けた方はそういう例に該当しなかった方々が多かったもので、まだ不明です。

ただし、マレーシア国籍の子どもの世代では、教会のフィリピン・コミュニティの活動に來ない傾向があります。親の世代は意識がフィリピンのほうにかなり向いていて一緒に活動をするけれども、2世代目になるとそのような意識は弱まるので、2世についても調べてみる意義があるように思います。

2点目の不可視化戦略について、マレーシアは資格や帰属がとても重要という話ですが、それは時代によるのかなと思います。1980年代には、マレーシアの人で、『これは自分のICだけれども、あなたと私は顔がそっくりだから、あなたにあげる』と言われてICをもらったんだ』と言っているフィリピン人男性がいました。しかし、1990年代以降、非正規滞在者に対する取り締まりが厳しくなり、実際検挙される人が目立つようになってから不可視化戦略が強まり、自分がどういう滞在資格があるのかについて意識せざるを得ない状況に変わってきたのではないかと思います。

葬送と定住の関係および ミャンマー人イスラム教徒の役割

水野敦子●2つ質問いただいたのでお答えしたいと思います。1つは、葬送協会に関わって、遺体をどうするのかということです。正確に内訳は聞いていないのですが、遺体を本国に送還する場合と、マレーシアで火葬する場合と両方あるようです。輪廻転生を信じるミャンマーの仏教徒にとって魂の器である身体の役割は「死んだら終わり」という感覚ですので、葬儀までは遺体を丁寧に扱いますが、たとえミャンマー本国でも、火葬にした場合に、遺骨を火葬場から拾って持ち帰ることは一般的ではありません。遺体を本国に送還しなかった場合でも、マレーシアで埋葬して供養するわけではないので、定住の度合いとの関係については、少し注意してみなければいけない気がします。

2つ目の質問の、ミャンマー人のイスラム教徒が現地でどのような役割を担っているかということですが、総人口に占めるイスラム教徒の割合に対して、イスラム教徒が医師などの専門職や自営業に占める割

合が高いということがあり、結果的に、私の報告で述べた高度人材には、イスラム教徒の比率が高いという特徴があります。つまり、現地で移民に対して公的手続きに関わるサービスを提供している人には、イスラム教徒が多いように見受けられました。これはもしかすると、現地のイスラム教徒たちとのつながりに関係があるのかもしれませんが、これについては、今後確認していきたいと思います。

インドネシア政府はマレーシアに暮らす 自国民の生活向上にどう貢献できるか

司会●ありがとうございました。それでは会場から2、3人質問をいただきます。この人に特別に答えていただきたいということがあれば、お名前をご指名ください。とくご指名がなければ報告者およびコメントーターの方がたに、それぞれ関連するところでお答えいただければと思います。

金子奈央(長崎外国語大学)●西さんに質問です。最後の結びの部分の『インドネシア人』としての社会統合の試みで、「インドネシア人としてマレーシアに居心地のいい環境を作る」と説明があったかと思っています。マレーシアの中でもサバ社会では、インドネシア人がインドネシア人として心地よい環境を作るうえで、また生活しやすい環境を作るうえで、インドネシア総領事館などインドネシア政府の役割が大きい印象があります。インドネシア人として居心地のいい環境をマレーシア全体においても作ることを考えた場合、インドネシア政府が大きな役割を担う可能性があるのかについて教えていただければと思います。よろしくお願いします。

西●インドネシア人としての社会統合という話をしたときのインドネシア政府の役割としては、海外在住者に対して合法的なステイタスを与えること、そして公共サービスを提供することです。インドネシア側が提供することでうまくいく公共サービスはインドネシア政府が提供する。マレーシア政府にはそれを許容してもらうことを求めるというかたちで、海外在住者の居心地のよさを追求するというのがまずは言えることかなと思います。

「プラナカン型」と 曖昧な境界収縮と拡張、硬直化

舩谷鋭（立教大学）●報告ありがとうございました。「プラナカン型」を使ったのは山本さんだけでしたか。それについてどう思われますかね。ようするにクレオール型ということですね、まとめとしては。最後に山本さんのまとめについてリアクションされたのですが、そのプラナカン型というまとめについて、もう少し補足を、ご本人でもかまいませんし、発表者でも補足していただければと思います。

西●プラナカン型とバンサ型の話については、私が十分に理解しているかどうかはともかく、マレー人はプラナカンであるというとき、マレー人であるかないかの境界が曖昧で線を引くことはできないし、その曖昧な境界の周辺の部分は広がったり縮んだりしている、その収縮と拡張の合間で境界付近の人たちが多数派のところに統合されていく、その境界が時期によって多少広がったり縮んだりするというようなイメージでいます。プラナカンをこのようなものとして捉えるならば、マレー人をプラナカンとして捉えるというのは、英領期から独立後にかけてのマレー人の形成というところを説明するときにとっても妥当な考えだと思います。

そのうえでなのですが、先ほど紹介した半島部では「マレー人らしさ」を求められると感じたインドネシア人の女性が、半島部でそれなりの社会的地位を有しているのに結局はミャンマーに行ってしまったという話などを聞くと、萌芽としてはプラナカン型の社会集団だったとしても、境界がすごく硬直化してきているという現状があるのかなと思いました。それをどのように表現すればいいのか、マレー人はプラナカン型からバンサ型に変質した、という言い方をすればいいのか、それともそもそもバンサ型とかプラナカン型というのはそういう意味ではないのかといったことについては、山本さんに聞いてみたいです。

時に包摂され、時に排除され 外から新たなものを持ち込むプラナカン

山本博之●プラナカンの特徴は、混血性が強調され

ることもありますが、今日は社会の統合のパターンとしてお話ししました。よその土地にも出自を持つけれど一部では現地化している人びとがいたとき、それを在来の多数派住民が自分たちの社会の一員として受け入れるかどうかという話です。現地化しているところを見れば多数派住民と文化的共通性を持っているので、時には多数派住民の一部だと言って受け入れられるし、よその土地にも出自を持つところを見れば外来者としての性格を持っているので、時には多数派住民とは異なるからと弾かれるというように、在来の多数派住民に入れられたり弾かれたりするのがプラナカンの特徴です。このように見ると、マレー人社会がインドネシア人を時に受け入れ、時に排斥することが説明されるだろうということでした。

在来の多数派住民から中に入れられたり外に出されたりするというに加えて、プラナカンのもう1つの特徴は、多数派の周縁部にいて外の世界とつながりがある人びとなので、外の世界から新しいものを持ち込むことができるということです。その社会にはなかったものや技術や考え方を持ち込んで革新を起こす可能性があるけれど、外来の新しいものを紹介された在来の社会は、その新しいものは受け入れたいけれど、それを受け入れることでそれを紹介した外来者の地位が上昇して自分たちの地位が下がるのを嫌がって、それはその社会で伝統的に行われてきたことと反するからといった理由をつけて拒絶したりします。ただし、それを外から見ると、拒絶したはずなのに、形を変えてその新しいものを多数派住民が受け入れているということがあります。結果として、新しいものを紹介した人は切り捨てられるけれど、そのアイデアがじつは取り込まれていって多数派住民が常に自分たちを革新していくという仕組みになっているのが社会の統合におけるプラナカンの特徴であるように思います。

まとめると、外の世界にも出自を持ちながらも部分的に現地化している人たちで、外の世界から新しいものや技術や考え方を持ち込んで紹介するという役割を持っているけれど、多数派住民からは自分たちの一員として受け入れられたり排斥されたりして、結果として、社会が革新される契機になりながらも、それを紹介した人びとはゆるやかに社会の多数派の一員になっていくというのがプラナカンの特徴で、社会の統

合パターンを考えると役に立つ考え方だと思います。

移民と就労者への着目から 出自国と受入国双方の包括的な理解へ

司会●東南アジア域内からマレーシアへの移民および就労者の実態について、インドネシア、フィリピン、ミャンマーをそれぞれ専門とする研究者によるご報告により、かなり明確にイメージできるようになったように思います。またマレーシアにおける社会の統合パターンを建国期からたどったうえで、その文脈の中にこれら3国からの移民および就労者を位置付けるコメントをいただいたことで、マレーシアにおける社会の統合パターンの特徴が明確に浮かび上がってくるように思いました。さらに、3か国からの移民および就労者のマレーシアにおける生存戦略は、他地域への移民および就労における生存戦略と異なる側面もあるようで、マレーシアへの移民および就労者に着目することが3か国からの移民・就労の理解について、ひいては3か国の社会の理解について、新たな切り口を提供しうる可能性もあるように思いました。

1990年代以降、マレーシアで外国人人口が増加するなかで、外国人に着目した研究の多くは、非正規滞在者を正規滞在者に転換する法的・行政的技術という視点からなされてきました。これに対して本パネルでは、移民および就労者に着目することが、出自国と受入国双方の社会を理解するという、より包括的な視点を得ることにつながることを示したように思います。本パネルはここで終わりとさせていただきますが、移民および外国人就労者に着目して社会を捉えていく試みについて、今後も議論を続けていければと思います。報告者の方がた、討論者の方、フロアからご参加くださったみなさま、どうもありがとうございました。